



瀬戸内の地域資源を活用した 地域活性化と次世代の育成について

香川大学経済学部 教授
古川 尚 幸

1. はじめに

現在、わが国は、少子高齢化や人口減少といった国の将来を左右する大きな社会課題に直面しており、そこから派生する様々な社会課題への対応が求められている。これらの課題は地方でより顕著であり、地方のなかでも特に離島や中山間地での人口減少による過疎化は早急に取り組むべき問題である。この離島や中山間地で見られる過疎化の問題は、いずれ日本の各地域でも起こり得ることであり、日本の将来の姿を表した縮図とも言うことができる。

他方、大学を取り巻く社会環境に目を向けると、ここでも大きな変化がみられる。2015年に文部科学省が示した「国立大学経営力戦略」のなかで、大学が果たすべき役割は、これまでの2本柱であった「研究」と「教育」に、新たに「地域貢献」を加えて、「研究」、「教育」、「地域貢献」の3本柱へと変化することが示された。特に地方大学では、その新たな役割として、地域活性化を担う人材の養成が強く求められている。

本稿では、香川大学経済学部における学生が主体となった学生プロジェクトについて、特に、私が指導している学生プロジェクトの取り組みを事例として取り上げ、そこから本稿の主題である「瀬戸内の地域資源を活用した地域活性化と次世代の育成」について考えてみたい。

2. 学生プロジェクトの意義

学生プロジェクトの詳細について述べる前に、その意義について確認しておきたい。すでに述べたように、大学は、「研究」ならびに「教育」に加えて、「地域貢献」が強く求められるようになった。しかし、それでもなお、大学としての大きな役割は研究機関や教育機関としての役割である。研究や教育を通じて得られた成果を地域に還元することで、大学は地域貢献の役割を果たすことができる。したがって、学生プロジェクトにおいて、優先されるべきは「学生の成長」である。学生の成長こそが、大学として学生プロジェクトに取り組む意義であり、時間という大切な資源を費やしながらか学生たちがプロジェクトに携わる意義である。その結果として、学生プロジェクトがもたらす成果が地域活性化の一助となり、地域に貢献できるのであれば、地域にとっても学生プロジェクトは大いに意義があるものと言える。

3. 学生プロジェクトの創出プロセス

当研究室では、ある地域課題に対して、研究室に所属する複数の学生からなるチームが、地域での取り組みを開始する。その後、人的ならびに経済的に自走できる目途がたった時点で、所属学部や学年に関係なく様々な学生たちが携わることができるよう、研究室から独立した学生プロジェクトを創出している。この創出プロセスにより設立した学生プロジェクトは、表1に示すように、14団体(2024年12月現在)であり、所属学部や学年の垣根を越えて、経済、法学、教育、農学、創造工学、医学の計6学部から400名を超える学生がそれぞれ所属している。

表1 学生が主体となったプロジェクト

プロジェクト名	設立年		地域		主なテーマ	
直島地域活性化プロジェクト	2005	地域	香川県直島町	直島	離島振興	カフェ経営
小豆島プロジェクト	2012		香川県小豆島町	小豆島		観光
さかいで沙弥島プロジェクト	2013		香川県坂出市	沙弥島		地域ミュージアム
OGIJIMAプロジェクトここから	2021		香川県高松市	男木島		私設図書館
松島プロジェクト Re:nk	2024		岡山県倉敷市	松島		アート
佛生山らぼプロジェクト	2020		香川県高松市	仏生山町	地域振興	世代間交流
Kitahama Lab	2020		香川県高松市	北浜町		商業施設
たどつまちLabo	2021		香川県多度津町	多度津町		歴史的建造物
綾川まちづくりプロジェクト With	2021		香川県綾川町	綾川町		多文化共生
Bonsai☆Girls Project	2012	テーマ	香川県高松市	鬼無・国分寺	産業振興	盆栽
KAGAWA Maker	2017					菓子
学生ESDプロジェクト SteeeP	2017				環境	海ごみ・食品ロス
ハニカムプロジェクト	2022					養蜂
学びのサポートプロジェクト START	2022				福祉	学習支援

4. 学生プロジェクトの概要

ここでは、主に当研究室が起点となり創出してきた学生プロジェクトのなかで、特に瀬戸内の島々や瀬戸内海をフィールドとしたプロジェクトについて、それぞれ述べていきたい。

4. 1 直島地域活性化プロジェクト

直島地域活性化プロジェクト(以下、直島プロジェクトと略)は、香川大学における地域活性化をテーマとした初めての学生団体として設立した。2005 年 10 月から直島(香川県直島町)において、直島町役場や直島文化村、直島の住民団体「うい・らぶ・なおしま」などの協力のもと、当研究室に所属する学生たちが主体となり設立した。2006 年 8 月からは、カフェ「和 cafe ぐう」を開業し、現在まで、このカフェを拠点として、様々な地域づくりに向けた活動に取り組んできた(写真 1)。

直島プロジェクトの基盤となるカフェ「和 cafe ぐう」は、毎週土日祝日の 11:00～17:00 まで営業しており、年末年始を除いて、一年を通じて営業している。開店以来、のべ 70,639 名(2024 年 12 月 1 日現在)を越えるお客様にご利用いただいている。直島プロジェクトでは、プロジェクト設立以降、カフェ「和 cafe ぐう」の経営を中心に、徐々にその活動範囲を拡げ、現在、大きく分けると、以下の 5 点を中心に取り組んでいる。



写真 1 和 cafe ぐう 外観

- ①カフェ運営を通じた環境問題への取り組み
- ②観光ボランティアガイドの実施
- ③小学生を対象とした防災ワークショップの開催
- ④高齢者を対象としたデジタルデバインド解消のためのワークショップの開催
- ⑤地域イベントの企画・参加

これらのなかでも、観光ボランティアガイドは、それまで休止状態にあった観光ボランティアガイドの会（NPO 法人直島町観光協会が事務局）を、2018 年 11 月から学生たちにより復活させた取り組みである。観光ボランティアガイド経験者や NPO 法人直島町観光協会の協力のもと、ガイドの実施に向けた座学による研修や実地での研修を行い、いまでは直島プロジェクトが有償で観光ガイドを行っている。

4. 2 小豆島プロジェクト

小豆島プロジェクトは、2012 年 10 月から小豆島坂手地区（香川県小豆島町）において、当研究室に所属する学生たちが主体となり、地域活性化の一翼を担うことを目的として設立した。設立当初は、坂手地区の地域活性化を目的としていたため、団体名を小豆島 SAKATE プロジェクトとしていたが、現在では、活動の範囲が広がったため、小豆島プロジェクトと改名して活動している。当初の活動の中心となったのは、長年にわたり地域で愛されながらも閉店状態にあったカフェ「喫茶白鳥」を復活することであった。実際に、この喫茶白鳥をコミュニティカフェと位置づけ、喫茶白鳥を学生たちの手で復活させ、プロジェクトの拠点として 2016 年 11 月まで喫茶白鳥を運営し、その間、様々な地域活性化に向けた活動にも取り組んできた。現在は諸事情により喫茶白鳥を閉店しているが、以下の 5 点を中心に取り組んでいる。

- ①地域フリーペーパー「白鳥だより」の発行
- ②小豆島八十八ヶ所霊場の清掃
- ③小豆島八十八ヶ所霊場の動画撮影
- ④坂手地区の在来種「徳本あんず」の栽培
- ⑤地域イベントの企画・参加

これらのなかでも、小豆島八十八ヶ所霊場の動画撮影は、学生たちが実際に遍路道を歩き、遍路道の状況やその途中でみられる景色などを撮影して、動画投稿サイトで発信するものである（写真 2）。初めて歩き遍路をしようとする際や小豆島を観光で訪れる際の参考になるよう情報発信している。



写真 2 小豆島八十八ヶ所霊場取

4. 3 さかいで沙弥島プロジェクト

さかいで沙弥島プロジェクト（以下、沙弥島プロジェクトと略）は、2013 年 5 月から、瀬戸大橋の開通を記念して建設された地域ミュージアムである瀬戸大橋記念館（香川県坂出市）を拠点として、学生が主体となり、公益財団法人 瀬戸大橋記念公園管理協会や坂出市役所、坂出商店街などの協力を得ながら、地域活性化の一翼を担うことを目的として設立した。

2013 年 10 月からはカフェ「Hashicafe」を開業し、現在まで、このカフェを拠点として、様々な地域づくりに向けた活動に取り組んできた（写真 3）。沙弥島プロジェクトの基盤となる Hashicafe は、毎週土日祝日の 10:00～16:00 まで営業しており、年末年始を除いて、一年を通じて営業している。沙弥島プロジェクトでは、Hashicafe の運営にほかに、現在、以下の 3 点を中心に取り組んでいる。



写真 3 Hashicafe から見た瀬戸大橋

- ①瀬戸大橋記念館のイベントの企画・運営
- ②坂出商店街でのこども向けワークショップの開催
- ③地域イベントの企画・参加

これらのなかでも、瀬戸大橋記念館内の Hashicafe でのイベントとして、香川県の郷土料理である「あん餅雑煮」の正月限定での提供や、坂出商店街でのイベントとして、坂出市内で産出したカンカン石(サヌカイト)を使ったこども向けワークショップの開催など、継続的な活動を展開している。

4. 4 OGIJIMA プロジェクトここちから

OGIJIMA プロジェクトここちから(以下、男木島プロジェクトと略)は、2021 年 10 月から、男木島図書館(香川県高松市)を拠点として、学生が主体となり、NPO 法人男木島図書館や NPO 法人男木島生活研究所、NPO 法人男木島観光協会などの協力を得ながら、地域活性化の一翼を担うことを目的として設立した。男木島プロジェクトでは、プロジェクト設立以降、男木島図書館の運営に協力しながら、徐々にその活動範囲を拡げ、現在、大きく分けると、以下の 5 点を中心に取り組んでいる。

- ①男木島図書館に併設されたカフェ運営
- ②地域のこどもたちを対象としたこども教室運営
- ③休耕地を利用した落花生の栽培
- ④観光ガイドマップの制作
- ⑤地域イベントの企画・参加

これらのなかでも、休耕地を利用した落花生の栽培では、かつて男木島で広く栽培されていた落花生を栽培しようとするものである(写真 4)。現時点ではイノシシによる獣害のため収穫量は少ないが、これから獣害対策を施したうえで、収穫量が十分に増えたら、地域の特産品開発に活用することが目標である。



写真 4 落花生の栽培

4. 5 学生 ESD プロジェクト SteepP(ステップ)

学生 ESD プロジェクト SteepP(以下、SteepP と略)は、香川大学における環境問題をテーマとした初めての学生団体として設立した。2017 年 5 月から、香川県環境政策課や香川県廃棄物対策課(現循環型社会推進課)、香川県地球温暖化防止活動推進センターなどの協力のもと、当研究室に所属する学生たちが主体となり設立した。SteepP では、現在、以下の 6 点を中心に取り組んでいる。

- ①食品ロス削減を目的としたフードドライブ活動
- ②海ごみ拾いイベントの開催
- ③地域の小学校に出向き環境出前授
- ④SDGs に取り組む香川県内の企業を取材してリーフレットで情報発信
- ⑤香川県学生地球温暖化防止活動推進員として地域イベントに出展
- ⑥地域イベントの企画・参加



写真 5 海ごみ拾いイベント

これらのなかでも、海ごみ拾いイベントでは、地域のコミュニティセンターと協力して、主に高松市内の海岸において、地域のこどもたちを対象とした活動を行っている(写真 5)。

5. 次世代の育成に向けた学生プロジェクト

当研究室を起点として取り組んでいる学生プロジェクトが本稿の主題である「瀬戸内の地域資源を活用した地域活性化と次世代の育成」のための装置として機能するために、これまでに述べてきた学生プロジェクトを通じて得られた知見について、その共通する点として、以下の 3 点をあげることができる。

- ①学生主体の取り組みであること
- ②自主財源を生み出すシステムをもつこと
- ③得られた知識を伝承するシステムをもつこと

まず、学生主体の取り組みであることについては、これらの学生プロジェクトは授業ではなく正課外活動に位置づけられるため、これらの活動を通じてプロジェクトに所属する学生は単位を得ることはない。また、教員はアドバイスを与える程度であり、プロジェクト運営上の意思決定は学生たちによる合議制で行われている。活動を通じて直面した課題や自ら発見した課題に対して、学生たちは自ら解決策を考え、それに基づき自ら実施する。実施後は、つぎの機会に向けて、自らの活動の振り返りを行う。個々の学生としても、プロジェクトという組織としても、知識や経験の蓄積が可能となり、成長につながる。

つぎに、自主財源を生み出すシステムについて、仕入れ代金や交通費、イベント開催に必要な経費など、プロジェクト運営にかかる経費は、カフェ運営による収益やワークショップ開催による収益など、プロジェクトとして自らの活動を通じて得られた収益によりすべて賄っている。したがって、外部からの経済的な支援がなくても、最低限の活動を維持・継続することができる。このことから、自主財源を生み出すことは、学生プロジェクトの継続にとって大切な要素であり、この点については、学生プロジェクトだけでなく、各地で取り組まれている地域づくりにとっても大切な要素であると言える。

最後に、得られた知識を伝承するシステムについて、ここで取り上げたプロジェクトの多くは、すでに卒業生を多数輩出しており、代替わりを繰り返しながら継続しているプロジェクトである。これらのプロジェクトでは、毎年、学生リーダーを中心に、部門制を導入して、プロジェクトのなかで役割分担をしながら活動している。これらの活動を通じて、知識や経験、スキルなど、活動に必要となるノウハウを、先輩が後輩に伝え指導する体制が整っており、速やかに途切れることなく代替わりを行うことができる。

6. おわりに

ここで述べてきた学生プロジェクトは、それぞれ「次世代の育成」のための装置として有効に機能すると評価できるが、「地域活性化」という点では様々な評価があろう。「地域活性化」を捉える際に、その目標設定によって、その成果に対する評価も異なってくる。この点については、様々なご意見を真摯に受け入れて、これからの活動の参考としたい。

なお、紙面の制約から、当研究室が起点となったすべての学生プロジェクトを取り上げることはできなかったが、すでに学会や論文を通じて報告しているので、詳細はそちらを参考にさせていただきたい。

最後に、本稿の執筆の機会を与えていただいた公益社団法人瀬戸内海保全協会に深く感謝するとともに、日ごろから各地域で活動に励むプロジェクトの学生たちを称え、時には温かく、時には厳しく学生を見守っていただいている地域のみなさまに感謝の意を表したい。

7. 参考文献

- 古川尚幸(2019)「地域と大学が連携した地域づくり～香川大学直島地域活性化プロジェクトを事例として～」『地域活性研究』10 巻,127-134 頁
- 古川尚幸(2019)「地域と大学が連携した地域づくり～香川大学小豆島 SAKATE プロジェクトを事例として～」『瀬戸内海』77 号,55-57 頁
- 古川尚幸(2019)「地域と大学が連携した地域づくり～KAGAWA Maker を事例として～」『地域活性学会第 11 回研究大会論文集』103-106 頁
- 古川尚幸(2019)「地域と大学が連携した地域づくり～香川大学経済学部取り組み～」『調査研究情報誌 ECPR』, えひめ地域活力創造センター,43 巻,1号,45-51 頁
- 古川尚幸(2020)「地域と大学が連携した地域づくり～香川大学学生 ESD プロジェクト SteeeP を事例として～」『地域活性学会第 12 回研究大会論文集』49-52 頁
- 古川尚幸(2021)「地域と大学が連携した地域づくり～香川大学さかいで沙弥島プロジェクトを事例として～」『地域活性学会第 13 回研究大会論文集』70-73 頁
- 古川尚幸(2022)「地域と大学が連携した地域づくり～香川大学 Bonsai☆Girls Project を事例として～」『地域活性研究』17 巻,67-75 頁
- 古川尚幸(2022)「地域と大学が連携した持続可能な地域づくり ～香川大学経済学部取り組み～」『調査月報』,百十四経済研究所,429 巻,2-9 頁
- 古川尚幸(2023)「地域と大学が連携した地域づくり～香川大学たどつまち Labo を事例として～」『地域活性学会第 15 回研究大会論文集』302-305 頁
- 古川尚幸(2024)「地域と大学が連携した地域づくり～香川大学佛生山らぼプロジェクトを事例として～」『地域活性学会第 16 回研究大会論文集』296-299 頁